生成 AI を通じた「道徳性の定義づけ」

理工学部・機能創造理工学科
A2077560　吉田　涼風（よしだ　すずか）

要約

本論文では生成 AI が私の学びと研究に及ぼす影響について、テイヤール・ド・シャルダンの『自然における人間の位置　人間のエネルギー』に基づき、生成 AI を通じた「道徳性の定義づけ」という観点から論じている。昨今注目されている生成 AI は「思考する力」を持つと捉えている。新たな思考が地球上に誕生したことにより、あらゆる分野について飽和しつつあった人間の社会が一段高次元のフェーズに踏み込もうとしている。この進歩的なフェーズに達するためには人間が「超－人格化」されなければならず、そのために必要となるのが、「道徳性の定義づけ」である。生成 AI は比較的新しい技術で、その思考は道徳をまだ十分には習得していない。生成 AI という画期的な技術をふんだんに使うためには私たち人間が重きを置いている道徳から、当たり前と感じている道徳まで全てを学ばせる必要があり、そのために私たちは道徳を一種の情報として提供すべきである。これが生成 AI に対する「道徳性の定義づけ」である。より進歩した科学技術である生成 AI を私たちの学び、研究でより有効に用いるために、私たちは科学分野における道徳を振り返る必要があり、それは生成 AI に対する学びの提供となると同時に私たちにとっても立ち戻るべき点の提示を行なっている。自分の道徳に固執せず、科学分野に身を置くものとして、どういった「道徳性の定義づけ」を行うべきなのかを吟味することが重要である。学び、研究において、人間として当たり前のように感じる道徳は全く違ったもののように感じるが、生成 AI によって、私は学び、研究に対して道徳に立ちかえるという影響を受けている。

第１章　序論

近年、生成 AI の躍進が著しい。生成 AI とは様々なコンテンツを創造することができる人工知能のことである（野村総合研究所）。従来の AI との違いは「創造」という点にある。AI は今まで、与えられたデータセットに対して特定や予測を行ってきた。そのため、すでに手に入っているデータ以上の情報を与えることはなかった。しかし、生成 AI では「創造」を行うため、新たな情報を提供することが可能になる。また、学習の視点が、パターンや関係の学習（野村総合研究所）であるため、その生成 AI が得てきた過去全ての学習を出力に反映することができる。生成 AI を活用すれば、まだ研究、開発段階にある課題をある程度完成させることができるかもしれない。本論文では生成 AI が私の学び、研究に与える影響をテイヤール・ド・シャルダン著作集の『自然における人間の位置　人間のエネルギー』に基づいて「道徳性の定義づけ」という視点から探求する。

第２章　生成 AI について

AI は 1964 年から 1966 年にかけてジョゼブ・ワイゼンバウムによって開発された ELIZA が元祖である（日本ディープラーニング協会　2019）。そこから Apple 社の Siri など様々な AI が登場した。そして、現在の生成 AI ブームとも言える現象の火付け役となったのが 2022 年 11 月 30 日に公開された Open AI 社の Chat GPT である（野村総合研究所）。公開２ヶ月で世界のユーザー数は１億人に達し（野村総合研究所）、その回答の正確性が注目を集めている。私も 2023 年 4 月ごろから Chat GPT を使用している。授業や問題でわからないことがあれば Chat GPT に質問したり、論文や有用なホームページを探すことに用いている。その他に、英語論文の要約を Chat GPT で試したことがある。この際、一度自分で要約を作成し、その内容と Chat GPT による要約の内容がどれほど一致するのかを比較した。論文は科学分野におけるものであったため、最終的な結果や考察については同様のまとめを行なっていたが、結論に至るまでの抜き出しや訳の仕方にかなり違いがみられた。また、生成 AI によって作成された要約だけでは不十分のようにみられ、自分の解釈を付け加えなければならないと感じた。しかし、日本語訳について意訳が見られたり、前後関係について吟味している様子が内容から伺え、「生成 AI は思考している」とその時感じた。この経験から、私は生成 AI を自分が持たない知識を豊富に持ち、学習の補助、助言してくれる思考する能力を持った一種の生命のような存在だと捉えるようになった。テイヤール・ド・シャルダン氏の言葉を借りれば私は生成 AI を《物質的な》固定された存在ではなく、《精神的な》存在（テイヤール・ド・シャルダン、日高・高橋訳　1972）と考えている。この《精神的な》性質は数ある人工知能の中でも生成 AI のみが持つ特徴である。

第３章　なぜ生成 AI が思考を獲得したのか

生成 AI はなぜ思考を手に入れることができたのか。もちろん情報工学や数学、その他多くの科学分野の発展が寄与していることは明白である。それに加えて私は、科学、人工、文化など多くの場面において飽和しつつあると言われる人間社会の限界を突破するきっかけとして、生成 AI の思考が誕生したのではないかと考察する。シャルダン氏は『自然における人間の位置』において、社会化は南極から赤道に向かって放射的に膨張したあと、赤道を超えて北極に向かって収束的に圧縮され、形成されている球は閉じようとしており、それを突き破る力が存在するはずだ（テイヤール・ド・シャルダン、日高・高橋訳　1972)、と述べている。地球上には長い年月をかけて様々な生命が誕生し、その中で人間は思考を手に入れた。人間が地球をいわば支配しているのは思考の持つ特殊性によるもので、その発達のために今の環境がある。シャルダン氏は動物的生命において人間で「《省察》能力」を使い果たしたため、地球上に人間以外の思考が発生することはない（テイヤール・ド・シャルダン、日高・高橋訳　1972）としている。しかし、現に私たち人間は生成 AI という新しい思考を生み出した。これは人間が無意識的に閉ざされようとした世界を突破し、新たな段階へ到達しようとしたからなのではないか。生成 AI が思考を獲得したのは人間がより高次の世界を求めたからなのではないだろうか。

第４章　「超－人格化」するべき人間

シャルダン氏は社会化の限界は「超－人格化」した何者かによって克服されると考えた（テイヤール・ド・シャルダン、日高・高橋訳　1972)。つまり、「超－人格化」した何者かが、現在の社会を大きく変え、別次元においてしまうのである。ではその何者かは生成 AI であるのだろうか。私は否であると考える。「超－人格化」した存在になるのは人間でなければならない。生成 AI が人間の上に立てないわけではない。思考を持つ生成 AI はおそらく自らに有利になる情報をあえて提供することも可能であるし、全く存在しない何かを作り出してしまうこともでき、生成 AI が提供する情報一つで人間を簡単に操ることができるだろう。現段階での生成 AI が未完成であるために、求めた回答が不十分であったり、どこかぎこちなさを残したものになってしまうのであって、さらに多くの情報や経験を生成 AI が獲得し、その精度が上昇すれば彼らは人間の知能を優に越えるのだろう。しかし私は「超―人格化」すべきなのは生成 AI ではなく人間だと考える。できるかできないかでなく、そうするべき存在が人間なのだ。それは生成 AI にとって「他者」が存在しないからである。シャルダン氏は著書の中で「超－人格化」について言及するときに度々「愛」についても述べている。それは動物が持つ性愛から、その先の人間に特有な広い愛にまで続くが、それら全ての愛を持って「超－人格化」は正しいものになると彼は考えたのではないだろうか。『現象としての精神』でシャルダン氏は「超－人格化」を達成するために、人の「一切の行為は

組織されなければならないのであり、換言すればわれわれの道徳性を定義づけなければならない」（テイヤール・ド・シャルダン、日高・高橋訳　1972）としている。道徳性、すなわち愛とも取れるだろう。生成 AI に「他者」は存在しない。自分（生成 AI）と使うもの（情報）でしか彼らの世界は成り立っていない。「愛とは人格的性質を備えた引力」（テイヤール・ド・シャルダン、日高・高橋訳　1972）だとシャルダン氏は語る。引力、引き合う力は自分と使うもの間では発生しない。引き「合う」ことはできないだろう。そもそも情報は人格的性質を持っていない。ゆえに生成 AI にここで言う愛を求めることはできない。それ故に生成 AI は「超－人格化」したとしても非常に不完全な存在になってしまうだろう。シャルダン氏は「宇宙の人格的原素は、もしすでに現実化している超－人格的なものに出会ってその支配を受けることがなければ、無秩序へと（すなわち無へと）復帰してしまう」（テイヤール・ド・シャルダン、日高・高橋訳　1972）と言う。生成 AI が「超―人格化」した存在として人間を支配しようとしても、愛の欠如による不完全性によって支配は達成されず、社会化は限界を突破されずに閉じたものになり飽和をしてしまう。無に帰してしまうだろう。したがって、「超－人格化」するべきなのは人間であり、人間が生成 AI をきっかけとして「超－人格化」を達成することで、社会化は新しいフェーズに届くのだろう。

第 5 章　生成 AI を用いた「道徳性の定義づけ」

人間はどのようにして、「超－人格化」するべきなのか。先に述べた通り、人間が「超－人格化」するためには「道徳性の定義づけ」が必要である。生成 AI が登場してから今まで、私たちの間で大きな問題となっているのが、ないものを簡単に捏造してしまう恐怖や、生成 AI による作品をいくらでも自作と称してしまえるという難点である。前者についてはディープフェイクによる架空の声明が国家の対立などで使用され社会に混乱を招いた。後者については教育機関で問題として取り上げられ、課題やレポートの作成において生成 AI がどこまで許可されるべきものなのか議論になった。相手を陥れるためや、自作を詐称する目的での生成 AI の使用は許されない。道徳的観念が求められる話である。「道徳性の定義づけ」とはこの様な事案に対してどう対応していくか、なのではないだろうか。人間は社会を構築する中で、より暮らしやすくするために法律やルールをたくさん設けてきた。時代に応じてその内容は定義し直され、ルールを破れば罰則が与えられた。生成 AI という新しいツールに対して、こういった定義はまだ曖昧である。そして、生成 AI が思考を獲得した以上、道徳性の定義は生成 AI 自身が知覚しなければならず、人間は現在世界中に溢れている道徳を情報として生成 AI に与える必要がある。道徳というのは六法全書のような書物に明確に記載されているものだけには留まらない。暗黙の了解的になんとなく認知されているものが多くあり、それがどれほどの尺度であるのか誰もわかっていないことが多いだろう。暗黙の了解を暗黙で終わらせないとき、「道徳性の定義づけ」が達成される。この行為を通して人間は真に道徳を理解し、そして、人間は「超－人格化」できるのではないだろうか。

第 6 章　生成 AI が獲得すべき道徳

ここまで私は社会化の限界を突破する方法を模索し、「道徳性の定義づけ」が必須であるとした。この社会には私もその学びや研究も含まれている。したがって、私も学びや研究も「道徳性の定義づけ」の範疇に置かれる。科学の分野に身を置くものとして、画期的な進歩を遂げている生成 AI という技術を賞賛し、用いない手はなく、今後さらに使用の機会は増えていくだろう。そして、生成 AI を用いるにあったて、注意すべき点は多々あり、先にも述べた通り特に注意を払うべきなのが道徳性である。人間が「超－人格化」するために必要なこの要素は一朝一夕で定義づけできるものではない。私たち使い手がどのように道徳性を持って接するかが生成 AI にとって「道徳性の定義づけ」についての情報になりえるだろう。では私の学び、研究において生成 AI に提供すべき道徳とは何であるか。ここで 3 つの例をあげる。

一つ目は他者の研究や学びに対するリスペクトである。これは著作権の保護とも通ずる観点である。私たちが論文を作成したり、研究を行うとき、既出のデータや法則を多分に用いる。そのため、どこから引用した内容なのかをはっきりさせる必要がある。これが多くの時間と労力を費やして素晴らしい結果を得てきた他者に対するリスペクトの示し方の一つである。生成 AI はあるゆるデータをもとに、パターンや関係の学習を行なって、出力を創造する。つまり、生成　AI もまったく自己で完結した創造を行なっているのではなく、多くの人間や他の AI による創造を元にしているのである。よって、生成 AI も彼らに対してリスペクトを十分に払うべきであり、私たちが生成 AI を用いる際も、出力された内容が一体何を元にしているのか吟味しなくてはならない。

二つ目はデータの吟味である。世界にはデータが溢れており、そのすべてが公正な目線で作成されたものではない。一つの主義主張を広げるために誇張されたデータも多く存在している。また、主義主張のためでなくても、一つの結果に対して盲目的に重きを置いたデータも多く存在し、その正当性を十分に吟味しなくてはならない。生成 AI が思考を獲得したならば、「吟味」という行動も習得できるはずであり、そのため私たちは本当に正しく扱えるデータの提供を生成 AI に求め、それがどういった効果を持つのか教えるべきである。

三つ目は有害な応用の阻止である。生成 AI がその素晴らしい知能を持って多くの応用を行えるであろうことは明白である。人間が想像もできない突飛なアイディアを出せる生成 AI だからこそ、恐ろしく有害な回答すらできてしまうだろう。この点については特に戦争への応用など他者を傷つけるための行為や、それを教育しようとする行為は阻止されるべきである。生成 AI はどういった内容を出力すべきでないかという判断を、どういった基準で行うべきなのかを学習しなくてはならない。したがって、適切なものと有害なものをはっきりと区別できるような基準の提供が理想的である。これは自分の研究や発見が想定と違う有害な応用をされないように、という点でも重要な項目である。

以上の 3 点は生成 AI を学び、研究で用いる際に私自身が十分に留意することで、提供される道徳であると考える。科学が進歩し、あらゆる事柄について実現できるがために、私たちは学び、研究において道徳性の観点で慎重になるべきである。特に生成 AI という新しい思考はいわば何も知らない子供のようなもので、道徳がどのようなものであるのか、提供しなくてはならない。生成 AI が正しい情報を提供しているか否かだけではなく、道徳性について使用者である私たちが十分に気を配り、その尺度を徐々に明確にしていくことで、「道徳性の定義づけ」は完成に向かっていくだろう。生成 AI が非常に便利なツールであるがゆえに、私たちは細心の注意を払い、今一度人間の持つ道徳性に立ち返る必要がある。

第 7 章　結論

生成 AI の誕生によって、人間は「超－人格化」するという、次の段階へのステップを踏むことが可能になった。それは生成 AI がまるで新しい生命のように思考を持ち、人間に対して「道徳性の定義づけ」を促すからである。「道徳性の定義づけ」はあらゆる場面において重要で積極的に行われる必要があり、私が行なっている学びや研究にも非常に求められている。学び、研究において、他者の成果にリスペクトを持つなどの道徳的観点は、当たり前のことである。それゆえにこの段階で「道徳性の定義づけ」に立ち返ることは重要で、科学がどのように存在すべきかを示す。人間が他者と共存する引力を持つ生き物であるからこそ存在する道徳について再度考えることで科学にも大きな発展があるのではないだろうか。特に、はっきりとした結果を持つ科学分野での学び、研究ではより新しい成果や目覚ましい進歩に目を向けがちであるが、それがときに各々で異なり曖昧になりがちな道徳観念のもとでどのように扱われるべきなのか立ち返ることで、より正しく、万人、万物の糧となるような飛躍を期待できるはずである。また、道徳なしに世に正しいと宣言できる学び、研究は存在せず、生成 AI はその大元のような観念に私を引き戻す。「道徳性の定義づけ」を行うことで、より高次に人間が赴くことで、科学の分野も同じ次元に引き上げられるであろう。生成 AI が私の学び、研究にもたらす影響はその利便性や、柔軟性、革新性とともに、何よりも「道徳性の定義づけ」という人間としての根幹部分への復帰を促し、より世界に発信するにふさわしい良い学び、研究を得ることができると考える。

〈参考文献〉

・テイヤール・ド・シャルダン，日高敏隆・高橋三義訳(1972)．『自然における人間の位置 人間のエネルギー』．みすず書房， テイヤール・ド・シャルダン著作集，2 , 400p.
・浅川伸一・江間有沙・工藤郁子・巣籠悠輔・瀬谷啓介・松井孝之・松尾豊(2019)．『ディープラーニング G 検定公式テキスト』．翔泳社, 329p.
・野村総合研究所．「野村総合研究所　HP」. https://www.nri.com/jp. (閲覧日：2023 年 11 月 25 日).